

対談「教員養成におけるTOEFL Junior®の活用と意義」



グローバル・コミュニケーション&テスティング
代表
Umezawa Naotomi
梅澤 直臣

協同出版株式会社
代表取締役社長
Onuki Teruo
小貫 輝雄

大学入試改革の行方が注目されています。

特に今回は大学入試センターで処理するだけでなく、

外部業者を活用することを文部科学省自身が明らかにした点も大きな話題になりました。

すでにこれに先立ち、TOEFL iBT®など大学入学者選抜で外部テストのスコアを活用する大学も現れています。

また各自治体が行う教員採用試験においても、これらの試験が多くの自治体で導入されています。

こうした背景にはどのような事情があるのでしょうか。

『教職課程』の発行元である協同出版株式会社 小貫輝雄代表取締役社長とTOEFL Junior®を運営する
グローバル・コミュニケーション&テスティング(GC&T) 梅澤直臣代表が語り合いました。

小さい時から英語にふれる環境を作る

小貫 GC&Tの代表に就任される以前は、OSAKA ENGLISH VILLAGE(英語村)にいらしたそうですね。

梅澤 1970年に開催された大阪万博会場跡地が2年前にEXPOCITY(エキスポシティ)というショッピングセンターとして再開発されました。8つほどのエンターテイメント施設が作られ、その中に英語村があります。そちらの最初の責任者を務めていました。

「何か目玉になる施設を作りたい」といろいろ検討した中で、英語村のプランが浮上しました。私はそれ以前にTOEIC®の実施・運営を行っている一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)に長くいましたから、運営会社の社長、会長とも以前から面識がありました。全く何もない状態から組織作りをしてオープンさせました。最近、日本各地で英語村を作る計画が持ち上がっていますが、その関係者の方々とも情報交換をして



世界中どこへ行っても 一定の評価を受け、 レベルに応じた試験があることが 評価されている 理由ではないでしょうか

私自身の経験をお伝えしています。

人々、私が英語村の立ち上げを引き受けたのも、まさにこのような英語を気軽に使える場が日本国内であまりに少ないという事情が関係しています。そういう場所がたくさん増えることが望ましいと考え、また企画自体にも非常に興味がありました。

実はオープン前の予想では小学生、中学生、高校生に来ていただけイマージだったのですが、実際オープンすると、保育園児や幼稚園児がたくさん来られました。お母さま方が英語教育に非常に熱心ということがよく分かりました。

小貫 文科省が2013年から「トビタテ！留学JAPAN」というキャンペーンを行っており、これを始めた理由として海外留学する日本人学生が以前に比べて減っていることがあります。背景として経済的な問題以外に英語力、特に英語を使うことに自信がないからだと言われています。この点についてどう思われますか。

梅澤 大学生以上の方が、新たに留学の準備をすることはハードルが高いと思います。小さな頃から英語に触れていくというのが非常に大事だと思っています。英語村もその1つの方法ですが、私どものTOEFL Primary®、TOEFL Junior®のようなテストで、段階的に英語に親しんでいくことが望ましいのではないかと思います。TOEFL Primary®, TOEFL Junior®に関しては、現在アメリカの学校等で普通になされている会話や先生の授業が出題されるため、オーセンティックな英語に触れることができるところに価値があるのでしょう。

大学入試に外部テストが導入される背景

小貫 国公立大学の入学者選抜でTOEFL Junior®のスコアにより試験が一部免除されたり、加点する大学が増えました。その背景はどういうことでしょうか。

梅澤 私どものテストは、クオリティの高さを先生方に評価していただき、大学入学者選抜で活用いただいております。高校の導入例も増えています。先ほど申し上げたように、英語圏で使われるオーセンティックな英語に触れることができ、しかもクオリティが高い。試験の内容も重箱の隅をつつくようなものではなく、受験される方の総合的な力を正確に測れるテストだからこそ、人気があるのだろうと考えています。

小貫 5キャンパスを持つ北海道教育大学の岩見沢キャンパスの大学入学者選抜でもTOEFL Junior®のスコアが使われているそうですね。また、広島大学や比治山大学でも採用されていると伺っています。小規模の私立大学から国立大学まで、広く採択されていると知っていますね。

教員養成で活用できるテストとは

小貫 私ども協同出版は「教員養成」というキーワードで、いろいろな仕事をさせていただいています。47都道府県の教員採用試験、一部政令指定都市は独自に教員を採用していますが、以前から多くの都道府県で中高英語科の採用試験に、TOEFL iBT®が採択されている事実を知っていました。

梅澤 TOEFL iBT®については、一定のスコアを取ると、世界中どこの国に行っても引けを取らない英語力が付いていると評価されます。それで採用試験にも使わ

文部科学省の改革を待つことなく、すでに全国の国公私立大学の入学者選抜で御社の試験のスコアが採用されていますね



れているのでしょうか。そこまで辿りつくためのステップとしてTOEFL Primary®, TOEFL Junior®から始めTOEFL iBT®につながっていくというストーリーが日本国内では無理がないと考えられますので、TOEFL Primary®, TOEFL Junior®を積極的に活用いただきたいと思います。

小貫 現在、文科省はスーパーグローバルハイスクール(SGH)、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に相当な額の補助金を出しています。SGH、SSHでは御社も積極的に活動しておられて、一部受験料の割引などに関わっています。SGHは筑波大学附属高等学校、玉川学園の高等部等が指定を受けています。SGHに対する御社としての取り組みはいかがでしょうか。

梅澤 私どもはそうしたグローバル人材育成に力を入れている学校を支援したいと考えています。TOEFL Primary®やTOEFL Junior®はTOEFL iBT®につながるテストとして親しんでいただけると思います。ですから、SGHなどの高校はできるだけ支援していきたいです。また、スーパーグローバル大学創成支援事業もグローバル人材育成を目指されているので、我々のテストは馴染むのではないかと思います。

小貫 小学校で今まで教員免許状に書き込まれていなかった英語が正課化されます。また中高においても、話すことが苦手な英語の先生もいます。こうした先生方のモチベーションを上げるために、このテストをどうやって活用すればよろしいでしょうか。

梅澤 我々のテストを受けていただいている受験者の方は、モチベーションが上がるようです。「受けたかった」「難しかったけど、すごく新鮮だった」「もう1回

受けたみたい」というようにモチベーションが高まっています。先生方にはそういう受験生の実情を知っていたらしく、SGH、SSHでは御社も積極的に活動しておられて、一部受験料の割引などに関わっています。SGHは筑波大学附属高等学校、玉川学園の高等部等が指定を受けています。SGHに対する御社としての取り組みはいかがでしょうか。

小貫 先生方自身がTOEFL Primary®やTOEFL Junior®を受験されることはどう思われますか。期待される効果等はありますか。

梅澤 教壇に立たれている先生方が英語力を高めるために大学のスクーリングに通われているという話を最近よく聞きます。そういうたった積極的な先生方を私どもはぜひ応援したいところです。例えばスクーリングの中でTOEFL Primary®やTOEFL Junior®を受験できる機会があると理想的ではないでしょうか。

先ほど申し上げたようにTOEFL Primary®やTOEFL Junior®は学校現場に即した内容が出題されるため、先生方にとっても違和感なく取り組んでいただけるテストです。ご自身が授業をされる際の様子をイメージしながら受験していただけるものだと思います。結果的にご自身の英語力に自信が持てる、授業をするのが楽しくなる、生徒や保護者の方からの信頼が得られるといった効果が期待できるでしょう。

グローバル化を加速させる取り組み

小貫 幼稚園に始まって小学校、中学校、高校、大学、社会人と、このグローバル化する社会で彼らが力を付けて

いく中で、TOEFL Primary®やTOEFL Junior®をどのように活用すればいいでしょうか。

梅澤 英語村の経験から、文科省が考える小学校からの英語より、はるかに早い年齢から英語を学ばせたいと考える風潮が強まっているのだと思います。グローバルにつながるテストを早いうちから受けることがトレンドになるのではないかでしょうか。TOEFL Primary®であれば、小学生の頃からしっかりと点数がとれるようになる。中学生になったらTOEFL Junior®でもしっかりととしたスコアがとれるようになる。そして、高校を卒業する頃には、TOEFL iBT®が受けられるようになり、高校卒業の時点でのまま海外の大学に行くことができる力が身につくでしょう。そういう環境を早く作りあげていくということが大切だと思います。関心を持たれている保護者の方に我々のテストを知っていただくことで、そういう道ができる、海外で勉強をする人や仕事をする人が増え、グローバル人材として世界に貢献していくという環境を一日も早く作りたいものです。

待ったなしの英語改革が必要な訳

小貫 日産自動車がルノーの傘下に入って、まさにグローバル企業になりました。ところが、会議をすべて英語でやるようになったところ、日本人は消極的で発言をしないとゴーン会長が仰っています。今後こういうグローバル企業は増える可能性があります。英語はコミュニケーションをとるための世界共通の言語だという認識を持たざるを得なくなっています。

梅澤 日産自動車だけでなく、楽天でも英語を社内公用語化しましたね。今後は英語が公用語になる以前に、それに備えるのがいいと思います。そうしておけば、例えば自分の上司が突然外国人になっても落ちついていられるでしょう。

今まさに文科省が英語改革をしようとしているのは、そういうグローバル化への備えでもあるのかなと思います。英語は小さい頃から学んでいれば、お金もそんなにかかりません。大人になってから英語力を高めようとすると、莫大なお金と時間がかかります。私はそういう社会人を本当にたくさん見てきました。小さい頃から学んでいれば、お金もかけずレベルも上がり、いきなり会社が外資

に買収されても対応できる人材になっているはずなので、そういう意味でも早い頃から始めることは大切です。

小貫 武田薬品は役員の7割が外国人です。こうなると買収の有無と関係なく、グローバル化していく中で、英語力は必要になってきますね。

梅澤 「日本を出なければ、日本語だけで生活できるので問題ない」という方もいますが、英語がみんなある程度できる環境になると、日本の底力は大きく変わる気がします。「英語は普通にでき、さらにもう1か国語できるようになるのが望ましい」という話を聞きます。まず英語だけでもある程度できる環境になれば、それが最初のステージになり、さらにもう1つ何か別の言語を使えるという次のステージも生まれてくるでしょう。こうなれば日本の国力は飛躍的に高まるのではないかと思います。

小貫 今回は教員志望者のための雑誌で対談をさせていただいている。教員になりたい学生たちに何かメッセージをいただければと思います。

梅澤 文科省の教育改革の中で、英語がより注目されるようになりました。改めて感じるのは教員の皆さんのが更に重要なということです。教員の皆さんのがより一層いきいき活躍されるタイミングが来たのだと思います。これから教員を目指す方々は、役割がさらに大きくなることでしょう。そうした方々が教える子どもたちがグローバル人材として育ち、日本や世界を支える力になるはずです。教員の皆さんの役割が本当に大切です。大袈裟かもしれません、「日本を自分たちの教育で変えていく」と高い志を持たれる方が、日本の英語教育をどんどん改善していっていただければ、ありがたいなと思っています。そういう方々を私たちは応援しています。

小貫 本日はありがとうございました。

